

# 日本におけるキリスト教宣教の歴史的考察Ⅲ

黒川知文

Tomobumi KUROKAWA

社会科教育講座

## 第3章 大正時代における宣教

大正時代ではあるが、実際には明治40年(1908年)から昭和6年(1931年)までの期間における宣教をみることにする。

この時代において、第一に、第二世代のキリスト教徒が出現した。大正元年において、植村正久は54歳、内村鑑三は50歳、海老名弾正が56歳であった。明治時代のキリスト教徒は、武士道や儒教の素養があり、国家との関わり合いに苦悩した。それに対して、大正時代になると、個人主義と自由主義、さらに教養主義がキリスト教徒の特徴にあげられる。

第二に、教派としての教会が独自の運動を展開していった時代でもあった。具体的には、メソジスト教会は禁酒運動、ホーリネスと日本伝道隊はリバイバル運動、日本基督教会は神学研究、日本組合基督教会は社会問題に従事した。また、無教会は知識人を中心に広がっていった。

第三に、この時期には社会問題への積極的な取り組みが見られる。鈴木文治の友愛会、賀川豊彦の生協運動、吉野作造の大正デモクラシー運動、さらには救世軍、YMCAの運動も展開した。また、石井十次の岡山孤児院、留岡幸助の家庭学校などの社会事業も行われた。

ここでは、民衆に影響を与えた宣教運動の中から、無教会運動、救世軍運動、全国協同伝道、再臨待望運動、神の国運動をとり挙げて考察する。

### 第1節 無教会運動

明治時代後期において、不敬事件以後、国家権力からの圧力が強まる中、内村鑑三は無教会主義を提唱した。これは、「福音主義を固執するが、西洋の伝統的な教会主義になんら拘束されずに個人の独立・自由を重視するもの<sup>(1)</sup>」である。

1891年1月9日、第一高等学校の新年の教育勅語奉読式において、囑託教員であった内村は、「御真影」に対して、宗教的儀礼ではなく会釈をした。内村は教員からも学生からも非難を受け、退職を余儀なくされた。さらに、当時のキリスト教会のほとんども、内村を攻撃する側にまわった。

このような状況において形成されたのが、無教会主

義であった。これは内村により「余は無教会となりたり、人の手にて造られし教会今は有することなし、余を慰むる讚美なし、余の為に祝福を祈る牧師なし、然らば余は神を拝し神に近づく為めの礼拝堂を有せざるか<sup>(2)</sup>」と述べられたように、様々な制度や儀式を廃して、教会の本質にたちかえろうとするものであった。内村が無教会思想を持つにいたった背景には、不敬事件以後、キリスト教会から「見捨てられた」という経験と、札幌バンド時代に、すでに学生たちによる自由な教会形成の経験があったことを指摘できる<sup>(3)</sup>。

無教会の意味について、内村は、以下のように論じている。「『無教会』は教会の無い者の教会であります、即ち心霊上の養育院か孤児院のやうなものであります、『無教会』の無の字は「ナイ」と訓むべきものでありまして、『無にする』とか、『無視する』とか云う意味ではありません<sup>(4)</sup>。」

このように、内村は教会そのものを否定したわけではない。現に教会において内村は説教をしているし、大塚久雄などに洗礼を授けている。教会の本質にたちかえり、聖書を信仰の本質とすることが、無教会の提唱するところである。

無教会運動は、内村の継承者たちにより発展していった。矢内原忠雄は、無教会運動の特徴を、以下の8点にまとめている。

1. 外国ミッションからの独立。経済的独立。
2. 制度的な組織教会をつくらなかった。政治的権力、社会的勢力、経済的財産を持たなかった。守るべきは信仰のみ。
3. サクラメント(洗礼、聖餐式など)を行わない。信仰だけで救われることに徹底した。
4. 専門的職業的宗教家がない。全ての信者が伝道の責任を持つ。
5. 聖書を重んずる。各自が聖書より直接に神から真理を学ぶ。
6. キリストの十字架による罪のあがないと、肉体の復活と、キリストの再臨による神の国の完成を信ずる。
7. 社会の問題について自己の立場から発言するのではなく、神の御言を語るという預言者的立場に立つ。真に自由独立な信仰の立場から政治の腐敗を糾弾し、社会の不義を批判する。

8. 日本人の頭と心、口と手と足とをもって、イエス・キリストの純粋な福音を聖書から直接学びかつ伝える<sup>(5)</sup>。

#### A. 宣教の方法

##### 1. 信仰雑誌の発行

1898年、万朝報社を退社した内村は、雑誌『東京独立雑誌』を出版した。2年後には雑誌『聖書之研究』を創刊し、1901年には雑誌『無教会』を創刊した。以後これらの雑誌により、内村は聖書の教えを宣教し、また、非戦論を展開し社会の不正も批判していった。なかでも、『聖書之研究』は、聖書研究と伝道とを目的とした月刊雑誌であり、一時『新希望』と改名されたが、内村が死ぬまで357号が刊行された。キリスト教会内にも多くの読者があり、最盛期には四千部以上発行された。

さらに、これらの雑誌の読者からなる教友会を全国に組織して、内村は伝道旅行の途中、各地の教会において聖書の講演会を開いた。

内村の弟子たちも各自が月刊雑誌を発行している。それにより聖書の教えと社会批判を展開した。

##### 2. 聖書講演会

1901年、内村は自宅で日曜聖書講義を開催した。翌年には、自宅で聖書研究会を開始した。これらの集会は、教会における礼拝に類するものである。聖書講義と讃美からなるが、献金と祝禱はない。献金の代わりに講義料が徴取された。

内村は、さらに、夏期学校での講演会、全国伝道旅行の際の各地の教会における講演会、教会での講演会なども行った。

##### 3. 信徒の独立伝道

無教会では、経済的独立と信徒による伝道を唱えている。無教会は組織を作らず、指導者に集会の運営が任されている。また、職業的宗教家（牧師や神父等）がないために、世俗の職業を持つものが指導者になった。その中で多いのが、大学教授や教師であった。献金により牧師を支える必要がないために、比較的時間の取れる教師が指導者になるのは、当然の結果であろう。ほかに退職した教師や公務員が指導者になっている。

#### B. 宣教の結果

無教会運動は、知識人層を中心として支持者を獲得した。例えば、内村の『聖書之研究』の購読者は、東北、信州、関東、関西さらには、海外にもいた。そして、農民、医師、教員、学生、軍人、官吏、実業家、地主、牧師、評論家、文学者など、広範な領域にわたる人々に読まれた<sup>(6)</sup>。その意味では、宣教は良き結果をもたらしたといえる。しかし、指導者の人格と教えに依存する傾向が強いために、個人崇拜になりやすく、また誤った聖書解釈が入りやすいことが弱点として指摘できる。また、献金をしないために、財政的に集会

が支えられることが困難な場合がある。それは、特に地方の集会に当てはまる。

## 第2節 救世軍運動

ウィリアム・ブース（1829～1912年）によって、イギリスのメソジスト教会を母体として組織された東ロンドン伝道会は、1877年にメソジスト教会を離れて救世軍と改名された。

救世軍は、組織を軍隊に似せて形成された。信徒は兵士、奉仕者は下士官、神学校は士官学校、献身者は士官、集会は小隊、地域区は連隊とされ、そのうえに本営があり、伝道は野戦と呼ばれる。

救世軍の特徴は、聖書の教えの実践にあり、教会の儀式や慣行を廃し、洗礼や聖餐式は行わなかった。また、スラム街での野外伝道、貧民や犯罪者や飲酒者の救済にあたり、簡易宿泊所や病院を設立した。

1895年に、救世軍は日本にもたらされた。初代下士官が山室軍兵（1872～1940年）であり、救世軍の指導者として活躍した<sup>(7)</sup>。

#### A. 宣教の方法

##### 1. 慈善活動

1900年、救世軍は、遊廓突撃隊を組織して、廃娼運動を開始した。これは、遊廓において文書を配布して娼婦に自由廃業を呼びかけるものであった。暴漢による救世軍への襲撃もあったが、政府がこれに対応して娼妓取締規則の交付が実現した。

一方、婦人ホームを開設して、娼婦を廃業して行き場のない婦人を受け入れ、裁縫などの技術をつけさせて社会に復帰するのを援助した。

1903年からは、禁酒運動が開始された。飲酒に苦しむ下層階級の人々を救済するのを目的とし、愛隣小隊という女性から成る隊を編成して、崩壊家庭の救済にあたった。1920年には、日本国民禁酒同盟が結成されて加盟団体が240を超えるまでになった。

1921年から貧しい家庭への慰問として街頭で開始されたのが、社会鍋であった。募金は国内の恵まれない人々だけでなく、海外の難民救護にも使用された。

##### 2. 文書伝道

機関誌『ときの声』は、英国救世軍機関誌『The War Cry』にもとづいている。1895年11月に『聞聲』として、創刊号が発行され、46号から『ときのこと』になった。月2回刊行され、福音のメッセージ、聖書の講解、信仰のあかし、報告事項からなっている。廃娼運動の際には、大きな役割を果たした。

『平民の福音』は、1899年に山室軍兵により書かれ出版された。この書はわかりやすい口語体で書かれており、日本古来の説話、諺、和歌、信仰の証などが福音とともに述べられている。民衆にも分かり易い書であった。

#### B. 宣教の結果

救世軍は慈善活動により、特に下層民の救済において、ある程度成功した。しかし、宣教よりも慈善活動に重点を置いていたために、魂の救いについては、それ程成功しなかった。また、本部が英国にあったことから、戦前においても欧米のスパイ容疑がかかり、迫害にあった。また、戦後においては、軍隊組織が時代の風潮にそぐわず、福音宣教の障害になっていると考えられる。時代に即した内部改革が必要とされる。

### 第3節 全国協同伝道

1915年から1917年にかけて、日本の諸教派を総動員する伝道が行われた。これは、1910年の世界宣教会議において過去の伝道体制が反省され、新たに協同による伝道を実施することが決定し、1913年にJ.R.モットが日本に派遣されて企画された宣教である。その意味では外から指示されたものではあるが、これに国内の諸教会が適切に対応して実施された。日本基督教会同盟、ミッション同盟から委員が選出され、委員長には井深梶之助、部長には植村正久と宮川経輝がなった。

全国を、東と西に二分して、伝道が実施された。

#### A. 宣教の方法

##### 1. 超教派の運動

全国を、愛知・長野を真中にして東西に二分して、それぞれに委員を立てて、諸教派総動員による超教派の宣教運動として実施された。大都市だけでなく、地方の町村にいたるまで、諸教会が何らかの形で参加した。さらには、この運動は、朝鮮、台湾、中国大陸にも及んだ。

##### 2. 集会形式

様々な集会が、この時、開催された。一般むけの講演会、伝道講演会、連合祈禱会のほかに、婦人大会、学生大会、教育者大会、会社店員大会、名士招待会、実業者大会などと、多様な集会が各地で開催された。

##### 3. 文書伝道

新聞紙上に、意見を掲載する新聞伝道と、トラクト配布も積極的に行われた。特に、上野公園で開催された大正博覧会においても、トラクトは配布された。その合計数は100万部を越えた。さらに、自動車による伝道隊も結成されて、宣伝活動に従事した。

#### B. 宣教の結果

3年間にわたる参加者の合計は、77万7千人以上であり、総集会数は4788、求道・決心者は2万7千人という大きな成果があった。教会形成をも大きく前進させ、1910年には教会数は586であったが、1915年には1056、1920年には1505と、3倍ちかくの増加がみられる。信徒数も毎年4万人以上の増加があり、10年間で2倍以上になっている<sup>(6)</sup>。

ところで、キリスト者である吉野作造は、1917年に東京帝国大学の学生基督教青年会理事長になり、翌年には黎明会を結成して、民本主義思想の啓蒙活動を開

始した。彼による大正デモクラシーは、全国協同伝道の直後に開始されたことになり、影響が少なからずあったと考えられる。すなわち、宗教的刷新運動が展開した後に、社会的政治的刷新運動が開始されたと考えられる。

このように、全国協同伝道は、日本社会を変化させるのにも成果があったといえることができる。ただし、大正デモクラシーは知識人における運動であったために、一般民衆を巻き込むことはなかった。そこに限界があったと指摘できる。

### 第4節 再臨待望運動

再臨待望運動は、1918年1月6日に東京YMCAにおいて開催された「聖書の預言的研究演説会」に端を発する。この会において、内村鑑三、中田重治、木村清松が演説した。中田の属する東洋宣教会日本ホーリネス教会では、再臨思想は、新生、聖化、神癒と並ぶ四重の福音のひとつである。木村は日本組合基督教会に属していたが、米国留学中にムーディー聖書学院に学び、ムーディーの再臨思想に影響された。

内村の再臨思想は、これらと異なる背景より持たれたと考えられる。内村は、第一次世界大戦が開始され1917年に米国がこれに参戦したことに失望した。その頃、キリストの再臨による世界の終末と平和の実現を唱えるようになった。また、個人的には、愛娘のルツ子の病死に直面して、葬儀において「ルツ子さん万歳」と叫び、終末における復活思想を強くもつようになっていた。米国の友人ベルが内村に送った米国信仰誌 *Sunday School Times* の再臨記事からも影響を与えられた。

#### A. 宣教の方法

再臨待望運動は、演説会を中心にして展開した。内村は聖書研究会を中止して、社会に語りかけることを目標にして、全国において演説会を組織した。

#### B. 宣教の結果

再臨待望運動は短期間で終結した。それは、キリスト教界内部からの批判があったからである。

海老名弾正、今井二郎、杉浦貞二郎らは、再臨反対演説会を開いた。また、1919年3月には、YMCAが再臨待望運動を拒絶することを表明した。組合教会、メソジスト教会、聖公会、日本基督教会は、再臨運動に対して冷淡であった。

超教派の運動として展開せず、組織化もされなかったためにも失敗に終わったと考えられる。

### 第5節 神の国運動

1930年から1933年にかけて展開したのが、賀川豊彦による神の国運動である。この運動は、昭和初期に展開したが大正時代の宣教の延長として取り上げたい。

この運動では、全国は90の地区に分けられ、これに

は台湾、朝鮮、関東州も含まれている。この90の地区に、神の国運動地方部委員会が設けられた。さらに、統括部、伝道部、教育部、宣伝部、社会部、農村部の6つの部が設けられた。神の国運動は、日本の教会史上、最大の組織的伝道であった。

A. 宣教の方法

1. 貧しき者への伝道

神の国運動は、伝道の対象を社会において陽の当たらない階級に求めた。この「貧しい者」や「圧迫された者」への伝道は、イエスの伝道にならうものである。

工場労働者が527万8千人、坑夫が45万9千人、輸送業雇用者が103万人、漁師が59万7千人、公共労働者が115万8千人が、神の国運動によってキリスト教にふれている。合計4千の教会において、100万人以上の人々がこの運動に参加した<sup>(9)</sup>。

2. 社会問題からの解放

神の国運動は、福音と教会に人々を結び付けるだけでなく、現実の社会問題からの解放をも求める運動であった。「神の国運動の宣言」には、社会の福音化として以下の点が推奨されている。

- ①人の権利と機会の平等
- ②人種及び民族の無差別待遇
- ③婚姻の神聖貞潔に対する男女平等の責任、家庭生活の保護
- ④女子の教育、社会、政治及び産業会における位置の改善
- ⑤児童人格の尊重、少年労働の禁止
- ⑥日曜日公休日の制定
- ⑦公娼制度の廃止、及びこれに類する営業の徹底的取り締まり
- ⑧国民的禁酒の促進
- ⑨最低賃金法、小作法、社会保険法、国民保険に関する立法の完備と施設
- ⑩生産及び消費に関する協同組合の奨励
- ⑪傭人、被傭人の間に適当なる協調機関の設置
- ⑫労働者教育の普及と徹底、合理的労働時間の制定
- ⑬所得税及び相続税の高率累進法の制定
- ⑭軍備縮小、仲裁裁判の確立、無戦世界の実現

これらは、キリストを信じ、神を知り、新しく生かされて「社会問題」を根本的に解決しなければ真の解決にはならないとする理念からのものである。この点すでに見た超教派的運動として展開した全国協同伝道や再臨待望運動とは異なる運動であった。

B. 宣教の結果

神の国運動は、前半だけでも16万人をこえる参加があり、農村の福音学校や都市のキリスト者工場主懇談会の開催、家庭礼拝や聖書研究の指導なども行った。

また、教育者の招待会、宗教教育講演会、日曜学校同窓会、聖書学校など、あらゆる階層の人々を対象とするものであった。(表1を参照)

しかし、進歩的牧師は支持したが、次第に教会内部において運動を批判する傾向が強まった。即ち、福音よりも社会的実践を重視する点が批判された<sup>(10)</sup>。

この運動は、確かに広く社会に展開したが、結果的には、労働者、農民に浸透するまでにはいたらなかった。その主要な原因は、時代状況にあったと考えられる。1931年に満州事変が勃発し、国内では血盟団事件が起こり、翌年には五一五事件が発生した。日本は急速に戦時体制へと向かい、神の国運動は、そのような状況において急速に終息せざるをえなかったと考えられる。

表1 神の国運動前半の統計

大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1970年、484頁。

出席者数	総集数	講師派遣数	誕日数	参加教会数	開催地	
一一、〇〇八	一五七	七八	九四	三五〇	三一	信徒修責会
一五七、九四二	六六五	二四二	五九四	五一九	二六一	一般特別運動
一六八、九五〇	八三二	三三〇	六八八	八六九	二九二	合計
二六五、〇〇〇	一、三〇〇	六三〇	七五〇	二五〇		前年一か年間統計
四三三、九五〇	二、一一二	九五〇	一、六一九	五四二		過去一か年半統計

第6節 結論

明治末期から大正、そして昭和初期にいたる、比較的自由な大正デモクラシーの時期から、国家主義が台頭して軍部の影響が強まり戦争に至ろうとする時期における宣教運動について、以下のことが結論づけられる。

- 1. 無教会運動は、聖職者ではなく信徒が独立伝道者として宣教し、信仰雑誌の発行と読者会での講演、聖書講義の方式を用いた。その結果、知識人を中心とする様々な階層に支持者を得た。

2. 救世軍運動は、慈善活動を中心にして日本社会に多大の影響を与えた。また文書伝道も行なわれたが、それほど救霊の効果をあげることがなかった。さらに、欧米に本部があること、軍隊組織であることなどが宣教の障害になったと考えられる。
3. 全国協同伝道は、超教派の運動として組織的に実施された。積極的に集会方式が採用され、文書伝道も行なわれた。この運動は大きな成果を得、大正デモクラシーを推進した要因の一つと考えられる。しかし、これは都市の知識人中心の運動であり、そこに限界があった。
4. 再臨待望運動は、超教派の運動として講演会を中心に実施されたが、内部分裂と外部からの批判により、短期間で終息した。
5. 神の国運動は、組織的に全国に広がり、あらゆる階層の人々を対象とする宣教運動であった。しかし戦争に至る時代状況により終息せられ、結果的には労働者や農民層にいくらかの影響を与えた。

#### 第4章 昭和時代における宣教

昭和時代は、太平洋戦争が大きく時代を区分する。戦争前においては教会は試練に立たされ、戦後は、宣教の自由を与えられて宣教が保証された。

##### 第1節 戦争と教会

###### A. 国家主義と教会

満州事変から日中戦争への流れの中で、軍国主義化、全体主義化が強化され、思想統制も実施されていった。そのような状況下、信徒の生活は弛緩していった。信仰の確信がゆらぎ、無気力な信徒が増加した。当時の教会の状況は、以下のように記されている。

日本の基督教会もまた、今まさに頭上に何か落下し来るもののような不安におそわれつつある……基督教会は希望なく、慰藉なき陰うつな状態に閉じこめられることになる。時勢もまた教会の発展に甚だ不利益にして、何れの地方に於ても同労者は旧来に倍する難戦苦闘を継続せらる<sup>(1)</sup>。

信仰と生活とが二元的に分離し、禁酒禁煙も守らなくなり、礼拝出席率も低下していった。時代を見極める確信が欠如しており、時代認識についての自信も喪失しており、その結果、教会は戦争に協力するようになった。キリスト教は、人心の安定のための役割、すなわち宗教報国に従うことになった。日中戦争は「文化の西漸」とみなされ、中国文明を日本が圧倒していくものと正当化された。そして、侵略ではなくて義戦論が唱えられた。伝道も著しく不振となり、求道者の数も減少した。

このような状況における宣教活動は、国策に従った

不自由なものであったが、なかには特徴的ないくつかの宣教もなされた。

##### 1. 宣教の方法

###### ①農村伝道

大正時代に展開した神の国運動における農村福音学校の延長上に、農村伝道があった。この時期、国民の7割が農民であった。1937年2月に第一回農村教化協議会が開催された。以下の記録がある。

当局（社会局）は、日本全国の日本基督教会に、農村と関係ありや否やを問い合わせた処240教会よりの回答に接し、内90教会は農村に關係あり、30は牧師館及び教会が農村に存在することを確かめ得た。日本人口の7割を占める農民に如何なる方法を以て福音を伝えるか。広汎の地域に一々伝道者を送ることを得ないが故にレイプリーチャー（信徒伝道者）の養成が問題となる。農村教会維持の方法としては、田畑附属の教会の建設と共に、半農半伝道者の派遣を要する<sup>(2)</sup>。

「半農半伝道者」、すなわち、自給伝道者が農村伝道にあたったことがわかる。

農村伝道の内的要因は、都市中間層よりもむしろ農民に信徒を見いだそうとした教会の方針にあった。他方、外的要因としては、国策が農民の自力更生と経済的基盤の強化にあり、ファシズム体制へ農民を動員することと合致するものであったことがあげられる。これは「伝道報国」の理念にあったものと判断されたと考えられる。

###### ②外地伝道

この時期には、朝鮮や満州への伝道が実施された。1933年には、満州伝道会が設立された。そして満州伝道が「陛下の思し召し」とみなされた。しかし、国策に従った外地伝道は、日本による統治にはほとんど疑いを抱くことなく、それ故、満州事変を一切批判することのないものであった。以下は外地伝道に関する記録である。

既に、東亜民族共存共栄とか、日華親善とか申す旗印が、高く掲げられたる以上、それらをして、空名に終わらしめぬため、また実に空名に終わらしめてはならないのだから進んでいふ叫びが、教会の一角に上げられたことでもあるから、すでに与へられた上記のような諸勢力に、加ふるに、新興勢力を以てして、満州伝道の開拓に、大なる氣勢を添えたいものと思ふ<sup>(3)</sup>。

外地伝道の主な方法は、講師による巡回説教会であった。本部より講師が派遣される方式をとったが、実際においては、観光旅行に近いものであった。

1938年には、文部省による以下の中国布教方針が提出された。以下はその内容である。2を略す。

目的 布教師をして住民の宣撫に当らしめ、対支文化工作に寄与せしむること

- 方法
1. 布教師をして善良なる住民を信徒に選ばしめ、軍の了解の下に特別の保護を与へ地方治安、維持、労役、宣撫等に之を利用すること
  3. 凡ゆる機会を通じて日本の実力、日本の支那に対する意図、支那事変の由来、支那の今後進むべき道、西洋各国の自由主義的帝国主義、日本文化の本質等を十分に理解せしめること

「住民の宣撫」と「対支文化工作」が目的に掲げられていることから、外地伝道が国策に従う政治的なものであったことが明らかである。さらに手続きに関して以下の記述がある。2を略す。

- 手続
1. 布教師をして渡支せしめんとするときは別紙様式に申る申請書を文部省に提出し、宗教局長の推薦状の下附を受け、布教師は現地に至り先づ右推薦状を軍特務部に提出して一切の指導を仰ぐこと
  3. 布教師は常に軍特務部内文部省派遣員と連絡を保つこと<sup>(4)</sup>

布教師を派遣するに際しても文部省と軍の承認を受け、その監督下にあったことがわかる。これでは自由に福音を宣教することはできない。

## 2. 宣教の結果

この時期の宣教は福音を伝えるものではなくて、戦争に協力する目的であったために、結果は失敗に終わった。

しかし、福井二郎による熱河伝道は、例外的に現地の中国にとけこんだ伝道であった。

福井は東亜同文書院に学び、ジャーナリストとしてしばらく働いたが、病気に倒れ、闘病生活後に回心した。そして、山口高等商業学校の助教授として教えていたが、35才の時に、中国伝道への神からの召しを与えられた。以下のように書かれている。

私はただイエス様に従いたい。どこまでも、いつまでも、たとえペテロの悔いはあろうとも、振り返りたもうイエス様の、いかにも厳しく、しかもあわれみに充ちたその眼差しに、ただいつまでも、どこまでも従って行きたい。野の末、山の端までも、師を捨て妻子を捨て、たとえ支那語や宣教地や……満州の人々を捨てても<sup>(5)</sup>。

福井は、夫人と熱河において開拓伝道を開始した。彼は神学教育を受けてはいないが、伝道は実を結んだ。だが、軍からも現地人からもスパイ容疑をかけられることもあった。

沢崎堅造は、福井の伝道を助けた。沢崎は、東京外国語学校と京都大学に学び、大学院に進んだ。そして京都大学の助手になり、カルヴァン研究に専念した。彼はファシズムの犠牲になった中国人に同情し、日本が犯した罪の償いとして、中国の人々に福音を伝えたいという使命を持ち、京都大学を辞した。そして、福井がいる熱河に行き、伝道活動に従事した。沢崎は蒙古人とともに生活した。彼はさらに奥地に入って伝道したが、ソ連参戦後に消息を絶った。

福井は、戦後日本にもどり、喜界島伝道の後に、池袋西教会の牧師になった。

## B. 戦時下における宣教

1939年に宗教団体法が成立した。この法律の成立にいたる教会の状況として、第一に、伝道のいきづまりがあげられる。ミッションが本国に引き上げ、援助が途絶え、教会は孤立化していった。宗教団体法によって国家の認知を得たいとする教会からの要望があった。

第二に、民衆の中にキリスト教を邪教あつかいする傾向があり、そのような誤解を解消したい教会の要求があったことが指摘される。

成立した宗教団体法は、しかし、教会の期待に反するものでもあった。それは国家が教会を管理する内容の法律であったからだ。すなわち、教会は国家権力の認可を受けた教団のもとに一本化されねばならず（1の6）、教団はその統理者の統轄の下にあらねばならず（1の2）、教団は国務大臣の許可制となり、個々の教会は所在地地方長官の認可を得なければ設立できない（3の6）とされていた。

1941年6月には30余りの教派が合流して、日本基督教団が成立した。成立をめぐる要因に関しては、二つの相反する指摘がある。一つは、自発的要因である。これは、それまで日本基督連盟が推進してきた諸教派合同運動が、ここに実現されたとする見解である。他の見解は、政府に屈服した結果だとし、国家の強い働きかけによって合同することが強制されたとする見解である。土肥昭夫は「民間にあって国家に協力する補完的存在<sup>(6)</sup>」と述べている。歴史的経過から判断すれば、国家の統制と動員のために設立したことは明らかであるので、後者が妥当であると考えられる。

## 1. 宣教の方法

太平洋戦争が開始されると、教会は義戦論を唱えて政府に協力した。欧米植民地主義を排除して東洋人による新秩序の成立を教会は主張した。文明（日本）が非文明（中国）を教化する—この理論によって、日本による中国侵略を正当化した。

また、教会において聖戦論も唱えられた。それは、天皇を現人神とする国体イデオロギーをキリスト教教理にあてはめるものであった。すなわち、皇祖神は父なる神、天皇は子なるキリスト、臣民は教会、大東亜共栄圏は神の国だとみなされた。

政府は、神社崇拝を国民に課した。その際、神社は宗教施設ではないとされた。これは神社非宗教論といわれるものであり、神社は「宗教」に関知せず、もっぱら「祭祀」のみを執り行い、とするものである。

このような論に対して、中田重治は以下のように反発している。

なんびとがなんと申しても、神社が宗教であることは明白である。驚を鳥と言いくるめることができても、神社は宗教ではないと言いくるめることができない。これを論ずるだけがやばである。されはわが教会としては、神社をば一宗教と見なしているからわが教会の会員はけっして神社参拝をしない。これをここに厳命しておく<sup>(7)</sup>。

しかし、教会のほとんどは政府の論を受け入れて、以下のように、参拝は宗教的意味のない「儀礼」であるとみなした。

神社は英雄、国家的恩人を記念するところとして何人も衷心より敬意を表すべきものである。特に皇室に関係深き神社に対しては、国民として赤子(せきし)の至誠を以て、崇敬の誠を致すべきである。此の意味に於ける神社参拝は基督者と雖も人後におつる者ではない<sup>(8)</sup>。

「カイザルのものはカイザルへ」とのイエスの言葉にもとづき、家の神棚に対しては敬うが祈らない、供物は与えず、柏手は打たず、低頭のみ、という態度を信者はとった。政府に妥協せざるをえなかった教会の状況に関して、小野村林蔵は以下のように記した。

今もしキリスト教の牧師に、伊勢神宮に対して不敬な言動があったという風評が世間に流れるなら、国民感情の激発によって、どんな理不尽な迫害の暴風が、日本全国のキリスト教会に襲いかからぬでもない。時は戦時、非常の際である。治安維持ということのために、政府が特別法まで設けている今日である。こうした思いが、一瞬、豊平の頭に走った。彼は全身が、責任感でしびれるような感じがした<sup>(9)</sup>。

1937年に、日中戦争が開始されると、日本キリスト教連盟の中に慰問事業部が創設された。教会は積極的に戦争に協力することになった。

この時期の教会活動に関して、富士見町教会の『新

報』の以下の記述が参考になる。

- 一、従来行へる紀元節及び新嘗祭の外、明治節及び天長節の当日特別礼拝を行ふ事
- 一、信仰生活の向上を計り社会風潮の一新を期する為に
  - (1) 礼拝、祈禱会其の他集会への出席を奨励すること
  - (2) 説教、講演、祈禱に依り日本国民たるの本分を恪循することの認識を深め、犠牲奉公の精神をも涵養すること
  - (3) 祈禱会に於ては少なくとも月一回主題を皇室、帝国、一般国民の為に求むること
- 一、銃後々援の強化持続に就ては出征家族訪問委員の活動に埃つこと／慰問袋は時に応じ提供に努むること／最寄会には、なるべく附近出征者の家族縁故者を案内すること
- 一、友愛会、婦人会、男女青年会に於ては申合の上戊申詔書の御主旨を奉体して忠実儉約を勧め、信義を重んじ、荒怠を誡め、日常生活は質素を旨とし、冗費の節約に努め、結婚披露の為にする宴会の如きは廃止し、以て非常時経済政策へ協力し且つ資源の愛護に努むること<sup>(10)</sup>

戦争が開始されると、一般信徒の考えも変化していった。日本基督教会に属するある婦人は、「決してキリストは西洋諸国と戦ってはならぬと説いて居らぬ」と述べて、慰問品発送活動に積極的に参加した<sup>(11)</sup>。

1942年1月11日には、日本基督教団統理富田満が、伊勢神宮を参拝した。そして戦時布教指針を定めた。その趣旨には、「各教師ハ教会ニ在リテ基督ノ福音ヲ宣布スルニ当リ宜シク時局ノ認識ニ透徹シ協心戮力ヲ以テ職域奉公ノ懈ヲ効サンコトヲ期スベシ」とあり、戦争に協力することが述べられている。

以上のことから、戦時下において教会は、非常時だとして宣教よりも国策に従って戦争に協力することに従事したことがわかる。

多くの教会が国家の政策に妥協していく中、少数ではあったが宣教活動を推進するキリスト者がいた。

ホーリネス教団は、1917年に設立されて以来、順調に成長した。大正時代における再臨運動がリバイバルとなり、昭和になり急速に発展した。1928年に教会が160、会員数が8400、牧師数213、受洗者1950であったのが、1932年には教会434、会員数1万9523、牧師400、受洗者数2882に急増した<sup>(12)</sup>。

1942年6月26日にホーリネス教団の信徒と牧師96名が政府により一斉検挙された。検挙理由は、スパイ容疑、国体変革、神宮への不敬罪、再臨問題、国際秘密結社容疑であった。翌年2月にも8名が検挙された。ホーリネス教団に対する弾圧事件である。

裁判の結果、同教団は有罪となり、牧師7名に懲役4年が言い渡された。うち4名は獄死、3名が服役完了となった。裁判費用がかさむために上告はされなかった。この時、日本基督教団は、ホーリネス教会を「異分子」として分離し、自らは「健全な」キリスト教会だとした。

無教会の信徒にも、宣教に従事していたために検挙された者がいた。

東京帝国大学教授として植民政策を講じていた矢内原忠雄は熱心な無教会の信徒であった。大学にて聖書研究会、自宅でも家庭集会を始めていた。1932年には満州国を視察旅行して、日本政府による植民地政策を調査した。1937年、矢内原は、軍部主導により戦争へ向かいつつあった時局を批判した。雑誌『中央公論』に「国家の理想」と題する文章を発表し、以下のように述べた。

ひとたび国家の理想に自己の立場を置く時、その正邪の判断は国民中最も平凡なる者にも可能である。無批判は知識の欠乏より来るのみではない。それは理想の欠乏、正義に対する感覚の喪失より来る。直観の貧困、啓示の枯渇より来る。ここに於てか国家非常時に対する哲学・宗教の任務の特に重要なを知るのである<sup>(13)</sup>。

キリスト者として時代を正しく見て、戦争をくいじめ、政府を批判しなければならない、というのが矢内原の戦いであった。同年に「神の国」と題する講演を行い、以下の言葉で締めくくった。

今日は虚偽の世において、我々のかくも愛したる日本の国の理想、或は理想を失ないたる日本の葬りの席であります。私は怒ることも恐れません。泣くことも泣けません。どうぞ皆さん、若し私の申したことがお解りになったならば、日本の理想を生かすために一先ず此の国を葬ってください<sup>(14)</sup>。

この講演内容を当局が知ることとなり、ついに矢内原は、東京帝国大学に迷惑をかけることを回避するために辞職した。これを矢内原事件という。

職を失った矢内原は、月一回公開聖書講義を行なった。また伝道月刊誌『嘉信』を発行した。さらに、自宅において土曜学校を開いた。夏には山中湖において聖書講習会を開催した。

聖書研究会と伝道雑誌の発行は、矢内原に限らず無教会の信徒がよく行なった宣教方法である。彼らは戦時下においてもかなりの信徒からの支持を得ていた。

## 2. 宣教の結果

戦争に協力する教会は、地の塩としての働きを失った。牧師は福音を語らず、信仰を持つ者は減少し、礼

拝出席者も急減した。

教会はなぜ国家に妥協したのであろうか。

第一の原因は、神学にあったと考えられる。この時期において国家を対象化する神学が不可能であった。国家と教会との関係が明確でなかったために、容易に国家の政策に妥協してしまったと考えられる。第二に歴史理解の欠如があげられる。再臨運動に代表される終末論的志向が強く、国体の基盤になっている神話的世界観をみぬけず、戦争へと向かう時の流れにも鈍感であった。そのために国家の政策を客観視できず、それを受け入れてしまったと考えられる。

## 第2節 戦後における宣教

日本のキリスト教史において、三度キリスト教ブームがあった。第一のブームは、安土桃山時代のクリシタン宣教の時期である。第二のブームは、明治時代の鹿鳴館時代であった。欧化政策にのっとりたブームであった。そして、第三のブームが、太平洋戦争の敗戦直後の占領軍支配の時期であった。

これら三つのブームに共通することは、政治権力者からの支援があったということである。そうであったからこそ、その支援がやむと急速に終息した。

### A. キリスト教ブームにおける宣教

マッカーサーは日本占領政策を実行していった。キリスト教に関しては、治安維持法と神道指令を廃止して、信教の自由をうたった日本国憲法が公布された。1945年12月には、宗教団体法に代わり宗教法人法が公示された。翌年1月には天皇の人間宣言がなされ、信教の自由が保証される時代になった。

#### 1. 宣教の方法

1945年から1950年が、キリスト教ブームの時期である。マッカーサーのキリスト教支持政策と米国とカナダの宣教団体からの積極的な援助により、信徒数も教会出席者数も順調に増加した。(表2と3を参照)

1946年に米国とカナダの宣教師による協力委員会が設置され、日本の牧師の生活費援助、教会堂の再建、聖書と賛美歌の配布が実施された。これに協力したのは、会衆派教会、ディサイブル教会、福音改革教会、福音ブラザレン教会、メソジスト教会、米国長老教会とカナダ合同教会であった<sup>(15)</sup>。

1948年には、米国の諸教派から成るミッションボード連合委員会が設立され、財政面においても日本の教会を援助し始めた。そして9千万円の資金がそのために使用された。

このように、この時期の宣教は海外からの援助にもとづくものであったとすることができる。



表2 戦後における信者数の推移

大内三郎『日本キリスト教史』609頁。

年代	数	
	教団全体	同累年指数
昭和22年	106,677	100
" 23年	121,844	114
" 24年	114,790	108
" 25年	118,911	111
" 26年	128,953	121
" 27年	117,472	110
" 28年	115,983	109
" 29年	120,297	113
" 30年	122,775	115
" 31年	125,764	118
" 32年	128,157	120

表3 戦後における教会集会出席者数の推移

同。

年代	教 団 全 体			同累年指数
	朝 拝	夕 拝	祈 禱 会	
昭和22年	36,829	9,930	10,932	100
" 23年	46,558	13,665	14,480	129
" 24年	49,684	15,343	14,945	139
" 25年	51,918	16,114	14,607	133
" 26年	55,255	18,085	15,381	154
" 27年	48,210	15,611	12,628	133
" 28年	46,756	13,864	12,288	126
" 29年	46,268	13,128	12,185	124
" 30年	49,012	13,364	12,331	129
" 31年	48,498	13,289	12,118	128
" 32年	50,296	12,525	12,204	130

## B. 福音派教会による宣教

福音派教会の定義については、ギャロップ調査機関のものを採用し、新生体験があり、聖書はすべて神のことばだと信じ、伝道する教会とする<sup>(16)</sup>。

中村敏の分類によれば、福音派教会は、四つに分類される。すなわち、1日本基督教団から離脱し自分たちの群れを再建した教派、2戦前にルーツをもちながら新しい理念のもとに設立された教派、3戦後来日した宣教団によって設立された新教団、4日本人によって独自に設立された群れ、となる<sup>(17)</sup>。

### 1. 宣教の方法

#### ①超教派の宣教活動

福音派教会の弱点のひとつは、個々の教会の規模が小さいということである。その半分以上が宣教師による開拓伝道から成立した教会であるために、平均教会員数は20~30人にすぎない。この弱点を補うのが、様々な超教派の団体による宣教活動である。

キリスト者学生会(KGK)、ビリーグラハム国際大会、日本福音クルセード、総動員伝道、日本伝道会議、甲子園りバイバルミッション等がその例である。たとえばビリーグラハム大会では、1967年の参加者は20万人、1980年には33万人であった。積極的な宣教活動が

展開されたことがわかる。

#### ②ゲリラ戦的宣教

聖書キリスト教会は、日本人によって独自に設立された教会であり、今日でも福音派を代表する教会である。これを事例研究としてとりあげる<sup>(18)</sup>。

尾山令仁は、1927年に東京に生まれ、陸軍経理学校在学中に終戦となる。敗戦により新たな価値観を求めていた尾山は、GIゴスペルアワーに出席し、中田羽後の説教により入信する。新生体験をもつ。その後、早稲田大学学生の時にはキリスト者学生会を創設し、卒業後に神学校に入学した。1953年3月15日、神学校卒業直前にして、高田馬場の通りに立ち、路傍伝道を開始した。日本人による自主独立の教会を形成するのがその目的であった。路傍伝道と集会により、5年後には100人が礼拝に参加するようになった。

1956年には日本海外宣教会を創設し、アジアの人々への謝罪運動を開始する。早稲田大学大学院博士課程にも学んだ。1970年には韓国への謝罪運動として日本軍により焼失した堤岩里教会の再建にあたった。その後、日本福音同盟実行委員長、日本プロテスタント聖書信仰同盟実行委員長、日本教会成長研修所理事長、日韓親善宣教協力会快調等を歴任する。

聖書キリスト教会の宣教方法は時期により異なる。開拓期には路傍伝道と夜の伝道集会が開かれた。社会運動としてはアジアへの謝罪運動を展開した。また、文書伝道として羊群社を設立して月刊誌『羊群』や入門書が発行されている。さらに、セルグループ活動、地域へのカルチャー教室、公園伝道、生活伝道、賛美伝道等、多彩な宣教の方法がとられている。

1995年には、床面積ではプロテスタント最大の会堂が建設されている。

### 2. 宣教の結果

1980年代において福音派教会の信徒数は、日本基督教団のそれよりも多くなり、宣教の効果があつたことがわかる。しかし、未だに総人口のうちキリスト者人口は1%以下にすぎない。いくつかの弱点も福音派教会に見られる。罪から救われることを強調するためにこの世の職業の神学的意義づけが弱いこと、反知性的傾向があり聖書研究や学問自体を軽視する傾向があること、他の教団を批判して自らの教団だけ正しいとする閉鎖的傾向があること、等が指摘される。

## 第3節 結論

昭和から現在にかけての宣教について、以下のことが結論として指摘できる。

1. 太平洋戦争以前に国家主義が強化される中、農村伝道と外地伝道が政府により採用され実施されたが政策の一環であったために失敗に終わった。
2. 戦時下、教会は日本基督教団に統合せられ、その多くが戦争に協力するようになった。しかし、ホー

- リネス教団、無教会等は、国家を批判したために迫害を受けた。
- 戦後、欧米宣教団の支援によりキリスト教ブームが起きたが、外部からの援助によるものであったために長続きしなかった。
  - 福音派教会による宣教は、超教派活動に参加し、伝統的宣教方法にとられない多様な宣教が実施されている。

**終章 整理と課題**

450年にわたる日本におけるキリスト教宣教の歴史をふりかえり、各時代の宣教方法と結果とを分析してきた。そして、失敗した宣教運動とその原因と、成功した宣教運動その内容とを検討すると、以下の7点が日本に有効な宣教方法として指摘される。(表4を参照)

表4 成功した宣教運動の活動内容

	集会方式	文書伝達	信徒の参加	社会活動	路傍伝道	超教派
ザビエル	○	△		○	○	
トルレス	○	△		○	○	
オルガンティノ	○	△		○	○	
ヴァリニャーノ	○	△		○	○	
復活キリシタン	○		○	○		
ニコライ	◎	△	○	△	○	
明治バンド	◎		◎			
リバイバル運動	◎	△	◎			○
無教会運動	◎	○	◎	△		
大挙伝道	◎	○	◎			○
全国協同伝道	◎	○	◎			◎
神の国運動	◎	◎	○	○		◎
救世軍運動	○	○	○	◎	○	

- 日本文化を尊重し、理解する
- 時代状況を的確に見抜く
- 政治権力とは妥協しない
- 集会方式と文書伝道を行なう
- 信徒が宣教運動に積極的に参加する
- 社会活動や慈善活動も行なう
- 超教派の宣教活動に参加する

**注**

第3章

- 大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1974年、372頁。なお、大内氏によれば、明治20年代の国家権力の強大化する時期に対するキリスト教徒の立場には、以下の三つがあった。1. 植村正久、小崎弘道、本多庸一ら福音主義を奉ずるとともに教会主義を堅持する西洋の伝統的キリスト教の正統をいくもの、2. 内村鑑三を中心とする福音主義を固執するが西洋の伝統的な教会主義になんら拘束されず「無教会」を宣言し、個人の独立・自由を重視するもの、3. 安倍磯雄、村井知至らユニテリアン主義に立ち、社会的実践活動に重点を置いて、特に明治30年代にはいって顕著になってきた社会主義

- 運動に挺身していったキリスト教社会主義者である。
- 『内村鑑三信仰著作全集』第2巻、36頁。
  - いわゆる「トイチャーチ」と内村が呼ぶ学生主体の自発的教会のことである。
  - 『内村鑑三全集』第9巻、71頁。
  - 「宣教百年と無教会主義運動」講演より。
  - 関根正雄編『内村鑑三』清水書院、1967年、105頁。
  - 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、792頁。
  - 救世軍に関しては以下を参照。山室軍兵『平民の福音』救世軍出版供給部、1899年；秋元巳太郎『日本における救世軍70年史』1～3巻、救世軍出版供給部、1965、66、70年。
  - 大内、前掲書、487～488頁。
  - 大内氏は、「従来の意味での『伝道』というにはあまりに社会問題が入りすぎている」と論じている。同、489頁。

第4章

- 『新報』1936年。
- 同、37、2、4。
- 同、32、3、171。
- 同、38、8、11。
- 熱河会編『荒野を行く—熱河蒙古宣教史』99頁。
- 土肥昭夫『日本プロテスタント教会史』下、聖恵授産所出版部、1990年、69頁。
- 中田重治『神社問題とキリスト教』289～90頁。
- 『福音新報』1936年3月19日。
- 小野村林蔵『小野村林蔵全集』2巻、598頁。
- 『新報』1937年12月。
- 『運動』3巻、18～19頁。
- 山崎鷲夫『戦時下ホーリネスの受難』新教出版社、1990年、7頁。
- 『矢内原忠雄全集』第18巻、644～45頁。
- 「神の国」講演は、1937年10月1日に日比谷公園市政講堂において開かれた故藤井武七周年記念後援会においてなされたものであった。同、653～54頁。
- 大内、前掲書、606～7頁。
- 福音派の定義については以下を参照。宇田進『福音主義キリスト教とは何か』いのちのことば社、1984年。
- 中村敏『日本における福音派の歴史』いのちのことば社、2000年、150～196頁。
- 『聖書キリスト教会宣教開始30周年記念誌』1983年、4～6頁。

**参考文献**

- 『キリスト教年鑑』キリスト新聞社、2000年。
- 『新キリスト教辞典』いのちのことば社、1991年。
- 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年。
- 海老沢有道『日本キリシタン史』塙書房、1966年。
- 海老沢有道・大内三郎『日本キリスト教史』日本基督教団出版局、1986年。
- 大内三郎『日本キリスト教史』同出版局、1970年。
- 小野静男『日本プロテスタント伝道史』聖恵授産所出版部、1986年。
- 笠原一男編『日本宗教史』I、II、山川出版社、1977年。
- 五野井隆史『日本キリスト教史』吉川弘文館、1990年。
- 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社、1980年。

(平成15年9月10日受理)